

高校生へ 私が選んだ1冊の本



「分かれあう心の進化」

松沢 哲郎：著

岩波科学ライブラリー

埼玉県

埼玉県立大宮高等学校

本村 祐紹

人間とチンパンジーのゲノムのほとんどは同じである、というのは有名な話だ。

では、人間はチンパンジーに比べて何が進化したのだろうか。すぐに思いつくのは、火を使う能力を得たり、常に二足歩行ができるようになったりした、ということだろう。だがそれだけではない。「心」もまた進化を遂げ、人間は「愛」をもつようになったのである。

この本では、この「心」の進化を比較認知科学の観点で解き明かしていく。こういうと難しく聞こえるかもしれないが、文章に使われている言葉も内容も至って簡単である。まず比較認知科学とは霊長類学と心理学の一部が融合したものである。そしてヒト科ヒト属の人間と、それ以外のヒト科の動物—主にチンパンジー、加えてオランウータン、ゴリラ、ボノボ—の行動を観察し、比べる学問である。この比較認知科学の実験を通して、両者の「心」の働きを調べよう、ということだ。一体これのどこが面白いのかと疑問に思うかもしれない。僕もこの本を読むまではそうだった。だが読み始めてみるとこれが思いのほか面白いのである。

特に心に残っているのはこの2つのことだ。1つ目はチンパンジーの利他性についてである。2つ目はチンパンジーにも芸術があり、チンパンジーの芸術と人間のそれとを比較することで、両者のものの捉え方の違いが明らかになったことである。どういうことか、ひとつずつ説明していく。

まずチンパンジーの利他性—協力といってもよい—について。これについて調べた実験がある。互いに見えるが行き来できない2つの部屋にそれぞれ1頭のチンパンジーを入れる。それぞれの部屋にはコインを入れると、もうひとつの部屋にリングが出てくる自動販売機のようなものがある。初めはお互いがコインを入れていたが、少したつとどちらもコインを入れなくなる—お互いリングがほしいのだから、相手のためにコインを入れてあげればよいのに。この実験からわかるように、チンパンジーは利他性を示すのが困難である。利他性は人間が進化によって得たものだと考えら

れるのだ。

次に芸術、特に絵について。チンパンジーも筆があれば自発的に絵を描く—絵といっても点や線だけであるが。だが何よりもチンパンジーと人間で異なるのは、ものの捉え方である。それに関してこのような実験がある。人間の子供とチンパンジーに片目がない顔の絵を渡す。すると人間の子供は目を描き入れる。それに対してチンパンジーは描かれている片目を塗りつぶした。渡す絵が顔の輪郭しかないものであれば、人間の子供は足りない顔のパーツを描くが、チンパンジーは輪郭をなぞった。つまり、人間は足りないものに目を向け、チンパンジーはそこに存在するものに目を向けるのである。

こうしたことから、人間は他者に不足しているものを想像し、それを満たす利他的な行動—「愛」—がとれる。著者曰く、「愛」とは「想像するちから」である。僕はこの「想像するちから」なしには人間は生きられないと思う。想像することは人間特有の能力であり、この「想像するちから」を使うことで人間関係はより良くなり、身のまわりの人を少し幸せにできるかもしれない。そもそも、「想像するちから」、「愛」が人間に特有のものならば、人間は「愛」のある生き物であり、これは幸せなことだと思う。

最後に、この本の内容全体をふまえて、自分なりに愛についてまとめてみた。愛の定義はいろいろあるかもしれないが、人間には人間ならではの愛がある。それは他者の立場になって考えることができ、その想像にもとづいて行動できる、というものだ。僕は、他者の気持ちを考え、それを行動に移せる人は優しく、強い人だと思う。人間はひとりでは弱いからこそ、「愛」をもって平和な生活を送ろうとしたのではないか。だからこそ一方通行の愛では意味がない。僕は他者への愛を行動に移すことを躊躇わない、強さを持ちたい。愛することができる人になりたい。この本を読んでそう思ったのである。

きっとこの本を読み終えて顔をあげれば、世界が少し色づいて見えるだろう。